

第5章

芽吹いた芽を地域で育てていくために

第1節 100人委員会の取り組みを通じての学びや気づき

100人委員会の当初は、グループのメンバーもお互いにぎこちなく、グループとしての団結があったわけではありません。しかし、回を重ねるごとに自然にグループとしてのまとまりが出てくるようになりました。見知らぬ者同士だったメンバーがひとつのテーマについて話し合っていく中で、お互いの意見を尊重し合えるようになり、自分では気が付かなかったところに納得する光景も見られるようになりました。このように議論を進めていく中で、徐々に主体的に参加することへの意識が芽生えるようになってきたと話す方もいらっしゃいました。

幅広い層の住民が住民の意見をもとに一からつくりあげていくこのような取り組みは、松阪市でもこれまでにそう多くはありませんでした。特に中学、高校の生徒たちがこれほど参加した計画づくりは、今までに例のないものでした。様々な人たちが同じグループのメンバーとして協力し合い、まとめていくことや、長期間にわたる参加となったことは想像以上に大変なことでしたが、多くの参加を得て議論が進められました。3 グループの委員の一人は、職員が最初のリードをしてくれたことでメンバーが打ち解けていった様子を思い出し、「職員さんも勉強したと思うし、私たちもそれ以上勉強させてもらったと思う。いろいろな考え方もあり、自分で思っている『こういう考え方もあるのだな』と思うこともあった。」と振り返っていました。

「環境」(5グループ)も、幅広い内容や、地域差などから一つの形にしていくことは困難でしたが、リーダーの働きかけによって少しずつまとまりが生まれ、身近にある小さなことから「環境」というテーマを考えられるようになっていったのです。「ばらばらだったグループがすごくまとまってきた」という喜びはメンバーにとってはもちろんのこと、サポート役として一緒に参加していた職員も同じでした。顔を合わせる回数が増えたことだけではなく、みんなで学び合い、地域づくりのための取り組みを考えていったことが力となってグループを一つにまとめていったのです。

このように、100人委員会の過程は、委員・職員両者にとって毎回は新しい学びの場となっていたのです。以下では、継続的な参加の過程で、委員の方々が感じたこと、学んだこと、考えたことを中心に、共通することをまとめ、これからの松阪市の取り組みを展望していきたいと思います。

1. 様々な人との出会い

100人委員会には、一般公募で参加した住民、学生、事業者、各団体の代表者といった幅広い層の地域住民が参加しました。既に地域で活躍されている人、地域福

祉に関心を持っている人、偶然参加することになった人など、参加のきっかけやか
かれている立場は様々です。

中でも印象的だったという声が上がったのは、中学生・高校生の委員との出会い
でした。100 人委員会には、市内の中学校・高校からそれぞれ 2～3 名の生徒が委
員として参加しました。比較的平均年齢の高い大人が中心となったメンバー構成の
中で、普段の生活の中では関わる機会が少ない者同士が一つの机を囲んだことは、
大人はもちろん学生にとっても刺激となりました。委員のみなさんからは、「学生の
意見が斬新だった」「素直さや新鮮さが感じられた」「若い人に期待するきっかけに
なった」といった声が聞かれました。学生たちも最初は戸惑いながらも、回を重ね
るごとに積極的に意見を表明したり、図や表をかくて意見をまとめる作業をしたり
と、それぞれの個性を発揮していきました。また、話し合いの中では、学校での取
り組みなどを積極的に紹介し、学生の代表としての意識を持って取り組んでいきま
した。このように若者と大人たちが協力し合って議論していく中で、これまで学生
や若者に対して持っていた偏見が期待へと変わり、今まで気がつかなかった新たな
一面を発見する機会にもなりました。真剣に取り組む若者たちの姿は、大人たちにも
喜びや、やる気を感じさせたようです。

「環境」(2 グループ)では、「環境についてどう思うか」について、まずは人生
の先輩からということで大人のメンバーが意見を出し、学生が聞き手となってまと
めていきました。そのことで、学生が頭の中で内容を整理し、理解した上で発表で
きるようにという工夫だったのです。それがきっかけとなり、年齢の差を気にする
ことなく、お互いの感じていることを出し合えるような雰囲気できたことで議論
も進んでいきました。このような雰囲気がつくられていったのは、学生たちの 100
人委員会に対する積極的な姿勢と大人が学生を否定せず受け入れていったという、
お互いの気持ちがあってこそそのものだといえるでしょう。

また、「こども」(6 グループ)では、グループの中でも「こども」の立場にある
学生 2 人が回を重ねるごとに個性を発揮し、6 グループの全ての中目標を含んだ「子
どものあるべき姿」という一枚の絵を描いていきました。学生たちが懸命に取り組
む姿から「今まで中学生というところと全く問題がありがちに見えとったが、ああいっ
た姿を見るとね、ほんとに中学生というのはすごい力をもっているんやなあ」と、
地域の若者たちの力を改めて見直す機会にもなりました。

2. 地域による違いの共有

話し合いの中で合併によって松阪市内の地域性が以前にも増して多様化し、地域
によって抱える問題や考え方が異なっていることを感じ取ることができました。自
分の地域の取り組みや問題・状況などの話題が自然に出され、住民同士の生の声を
聞けたことを「ひしひしとを感じるものがあつた」と振り返った委員さんの方もいま
した。

「高齢者」(14 グループ)では、テーマについて話し合うなかで、海から山まで

それぞれが住んでいる地域の特色を教え合ったり、メンバーの一人である民生委員・児童委員が地区での活動を事例として報告したりと、自分の体験をもとに地域の様子を話す場面が見られました。100 人委員会に参加したことで、地区座談会の時に比べ、さらに広い視点で市内の様々な意見にふれることができ、自分の暮らす地域の「当たり前のこと」が全ての地区に通用するわけではないということを理解することができました。このように、それぞれの見方が違うことを受け入れることによって、様々な発見をしながら、多様な意見を認めあっていく雰囲気生まれてきたのです。

3. めばえ・自分たちでできることとは…

多くのメンバーたちは、今までわからなかったことを学ぶことができただけでなく、同じ松阪市民の生の声を聞くことで、地域の課題を今までよりももっと身近に感じることはできたと振り返っています。そして、「自分たち」もしくは「地域」の課題であるという認識は、「行政がやるべきもの」と考えていたことであっても、実は自分たちで解決できる課題もあるのではないかと、その分担をしていくことが大切なのではないかという気づきにつながっていきました。

「防災」について話し合った 7 グループ、8 グループでは、災害や防災を身近な問題と感じていたメンバーの意識や、災害に限っては特に自分たちの力で助け合えないと命があぶないという意識から「自分たちで」というたくさんの意見が出されました。自分の身は自分で守る、それにあわせて行政の力を得る、という姿勢を基本として共有できるよう、自主防災組織や避難訓練、地域のネットワークづくりなど連携が必要だということで意見が一致しました。「仮に起こった時にも、普段やっていることを災害時にもやればよい」といえるような、普段からの近所付き合いの中からつながりを築いていくことが大切だという認識を持つようになりました。

また、「こども」(4 グループ)では、生命・安心・安全という問題を議論の基本として取り組みました。子育てに関しては、地域で子育てしていくことや親が子とふれあえるような体制づくりを地域の課題と位置づけ、地域の課題は地域で解決できるような、持続可能な活動が必要であることが話し合われました。

このような「自分たちで・地域で・行政で」という役割分担、協働の考え方は、発表会を終えた後も委員のみなさんの中に根つきつつあります。

4. まとめ ～これから地域で…～

このように、100 人委員会に参加したことで、地域への関わり方が変わったという人もいます。「環境」グループに参加していた委員の一人は、グループでたどり着いた「地域の中には『行政が支えるべきこと・個人でやるべきこと・地域でやるべきこと』がある」という結論に強く共感し、地域でごみの分別指導員をすることで、住民に一人ひとりができることを示していこうとしています。また、ある民生委員・児童委員は、「実際にやりだすためには一押しが必要だが、自分でもこの機会に一押

ししてもらったという感じかな。民生委員・児童委員が対象にしている人以外にも広く支援するきっかけにもなった」と、今まで感じていた思いを行動に移すことができたようです。一人ひとりの身近なところから、地域社会の課題はみんなで考えていかなければならない問題であるという意識が100人委員会の取り組みを通じて芽を出しはじめました。

100人委員会に参加した住民のみなさんには、長い期間の参加で負担に感じた時もありましたが、それ以上に「松阪市がよくなってほしい」という地域に対する思いがありました。しかし、この議論した内容が100人委員会に参加した住民の間だけで完結してしまわず、松阪市の住民全体の意識に働きかけ、共有できるものとなっていくことが何より大切であることを感じています。

100人委員会でもとめられた意見は、地区座談会で集まった地域の思いに100人委員会の委員のみなさんの思いを加えて形となったものです。地域生活を支えるためには、福祉を限定されたものではなく、生活そのものとしてとらえなければならぬと多くの住民が感じています。松阪市を現実と理想の両面から見つめていく中でさらに高まった、「松阪市をよくしていきたい」というたくさんの思いは、松阪市地域福祉計画の基本理念である「だれもが主役 地域の絆による支え合いのまち松阪」に集約され、さらに5つの基本目標の中で具体的な実施目標となりました。取り組みの中で練り上げた理想をどのように実現していくのかは、地区座談会、100人委員会、地域福祉計画編集委員会で積み上げられた地域福祉計画を確実に実行していけるかどうかにかかっています。住民、行政、社会福祉協議会、そしてあらゆる社会福祉に関わる人々・事業者が、協働して本計画の取り組みを実施していかなければなりません。

本計画は、「はじめの一步」に過ぎません。計画はできて終わりではなく、できたところがスタートです。これまでの住民の積み上げてきたすばらしい成果を行政もきちんと受け止める必要があります。

「だれもが主役」となって「地域の絆」を強め、松阪市を「支え合いのまち」として元気にしていくのです。